

兵庫県の大正期における保育事業

吉 森 恵

Nursery Business in the Hyogo in Taisho Era

Megumi YOSHIMORI

Japanese working mothers have always had difficulty with child care since Japan began to develop into a modern state. It is still in controversy today.

My concern in this paper is to investigate and consider what the purpose of their system. This is a continuation of the previous report that takes the Meiji era as an object of study.

Key words : early childhood educational service, child welfare, Hyogo prefecture, Taisho era
保育事業、児童福祉、兵庫県、大正期

1. はじめに

働く女性の子どもの養育の問題は、今日だけでなく、日本が近代化する中で抱えてきた課題でもある。

近畿福祉大学紀要第8巻第1号（平成19年6月）において、兵庫県の明治期における保育事業について述べてきた。今回は、兵庫県を対象に、大正期になされた保育事業が、どのような目的で生まれ、いかなる保育方法がとられていたかを探ることを目的とする。

2. 大正期の社会事業

(1) 大正期の社会事業とその背景

大正期は、社会事業に対し単なる明治期から昭和期への移行期ではなく、近代的社会事業へと脱皮する激動期であった。社会体制は

明治以来の幕藩体制が揺らぎ、それが政党勢力にとって変わる大正デモクラシー時代となる。都市部には享樂的文化がはびこる反面、スラム化が生じ民衆騒動、労働争議の激化など社会的矛盾が噴出した。その背景となったのが大正3年の第一次世界大戦参戦である。主戦場の欧州から遠くはなれた日本であったが軍需物資をはじめとして多くの物が求められ、後方支援の役割を担うことになる。そのため、日本国中が第一次世界大戦終了の大正7年まで、軍需景気に伴う好景気に見舞われ活況を呈すことになる。そこでは、人手不足、物不足が生じ、農村から都市へと人が移動、物価は上昇し、貧富の差は益々拡大したのである¹⁾。

大正7年8月3日に富山県新川郡魚津町で漁民の主婦たちによる米穀商店襲撃事件をかきりに、民衆蜂起の米騒動は、大都市を中

心として全国的に広がっていった²⁾。神戸では、8月11日の夜、湊川公園に三々五々集まっていた夕涼みの市民の雑談に花が咲き、米価についても話し合っていた。これら市民の一団が新開地方面の米穀商に米の安売りの陳情に行ったが実現せずその日は流れ解散となった。翌12日は、市内の随所で米騒動が起きた。米穀商に白米の安売りの依頼、強要がひどくなると、白米の強奪に及んだのである。それがさらに、米を買占めていると風評の高かった鈴木商店の焼き討ち、家屋管理業兵神館の焼き討ちへと拡大したのである³⁾。また、この騒動の巻きぞえを受け騒動と全く関係のない、神戸新聞社の3階建の新社屋が全焼までしてしまった。これらを行った集団は、偶然集まった一団が集団となり、それに参加するものが増え、大集団となって行動を共にしたものであった⁴⁾⁵⁾。

政府はこの事件を機に治安の取り締まりを強化するだけでなく、社会事業の充実を緊急の課題とした。しかし、この課題に至るまで貧困は社会的な問題であり、社会事業は、公的側面を持っているという認識が関係者間に定着するまでには時間を要したのである。その時間の中で、これまで明治30年の恤救法案をはじめ、救貧法政の改正の試みがなされるが、いずれも頓挫し結局昭和4年の「救護法」まで改正の努力は実らなかった。しかし、立法化が何度も試みられたことにより、社会福祉事業に対する認識の基本的転換が始まっていったのである⁶⁾。

3. 兵庫県下の保育事業

一方、兵庫県の保育事業は、次のように行われたのである。

1) 民間の保育所

但馬の地で最初の保育園は、大正2年創

立された美方郡浜坂町の芥信園である。創立者は高田敬三郎、ナカ夫妻である⁷⁾。

敬三郎は同志社大学神学部出身の伝教師であり、明治40年に兵庫県温泉町赴任、明治43年に浜坂町に転任し伝道活動に専念していたのである。

ナカは、結婚前、会津幼稚園で1年6ヶ月の勤務経験があり、浜坂で週1回の日曜学校で保育を行っていたが、これでは保育効果がないと感じ、一年を通しての保育に踏切ったのである。

設立にあたっては民家を借り受け、保育用品は自宅の物品でとりあえず間に合わせ、月謝10銭、それにアメリカミッションからの補助を加えてのスタートであったが、教材費など運営には非常な苦労を続けたという。

保育内容は、先にナカが幼稚園に勤めた経験と、それに加え、頌栄保育伝習所ハウ女史の講習も受け、歌や遊戯にフレーベルの恩物も使用し、聖書の話、浜辺に出たの地引網や魚の観察など内容の豊富な優れたものであった。大正9年には、同町御屋敷町に移転した。

大正3年4月に私立篠山保育園が設立された。同町出身の河野まさ子は、永年神戸市内の幼稚園に勤務し、篠山町にも幼稚園の必要性を町長や関係者に訴えてきた。その願いが受け入れられ、幼稚園ではなく、保育園として同町尊宝寺に設立されたのである。保育は1年、2年保育とし、園長は町長が兼任し、保母3名、幼児125名、保育料は月額30銭であった。保育の状況は郊外保育、会集（談話）、折紙、唱歌、遊戯、豆細工など幼稚園式であった。幼児数は、開設後、大幅に減少し、翌4年には80名、以後77名、89名と横這いを続けた。その後、大正8年には園を尊宝寺より篠山小学校講

堂に移転し、幼稚園へ移行の準備にとりかかった。そして、大正9年に三月町立篠山幼稚園へと再出発し、それと同時に私立篠山保育園は、閉園になったのである⁸⁾。

大正6年8月、久原房之助の寄付により、住吉区民が発起人となり、財団法人住吉遊喜園設立をはかり、翌7年8月に竣工された。

この園は、小学校入学準備のための幼稚園と保育所を兼ねた施設であった⁹⁾。

大井英（のち横河英）は、大正11年明石郡二見の邸内に横河保育園を開いた¹⁰⁾。

対象としたのは、母親と死別した乳児、病弱な母親の子女、両親とも社会的活動で外出がちな家庭の子どもたちを預かって保育した。広大な別邸と庭園を全部開放して保育園とした。児童の健康管理については、専門の大学教授に委託した。

英の父横河震八郎は、明治13年神戸において最初の小児科医を開業、明治25年に始めた子供海浜病院を「子供のお里」と名付けたように、養護施設機能、虚弱児施設、通園の保育施設と3つの機能を持ち合せた保育事業をおこなった。

大正5年、城ノブは45歳の時、「婦人救済施設・神戸婦人同情会」を設立し、神戸市下山手通り4丁目で事業を開始した。これは、大正期は、日本の資本主義の発展にともない働く婦人の大幅な増加をみたが、第一次世界大戦後の経済恐慌の慢性化や、関東大震災、大風水害などが続き、生活は次第に苦しくなり、妻や娘も一家総出で働かざるを得なくなった。一方、母性保護に関する法律はなく、ようやく工場法で職工15人以上を使用する工場の産婦に対する保護を規定し、産後5週間を経過しないものに就業させることを禁じているのみで、それも産後3週間経過後医師が支障なしと認

めた場合はこの限りではないと規定している。

一方、農村の労働力は都市に吸収され、中農以下は特に生活不安に陥り、子女の身売りなども行われるなど暗い世相になった。家庭不和、母子心中などが後を絶たず、不幸な女性のために、その相談相手となり、身の置き場のない女性を受け止める場所づくりに決然と立ち上がったのが城ノブであった。

大正6年3月に、宮本通2丁目に150坪の地所を購入し、翌7年に建物を竣工、さらに大正14年には神戸市灘区青谷町に390坪購入し、母子寮と保育所「青谷愛児園」を開設するまでに発展させた。同情会の事業は、大正、昭和と、城が昭和43年逝去した後もさらに発展を続けたのである¹¹⁾。

神戸市青谷に神戸婦人同情会愛児園を生活苦、家庭不和等で悩む女性を援助すべく城ノブは大正5年に「神戸婦人同情会」を結成し婦人の保護に当たる。大正14年神戸市青谷に母子寮と神戸婦人同情会愛児園を開設する¹²⁾。

淡路島における最初の常設保育所は中村託児所であり、大正15年4月中村久子が津名郡塩田町（現在の津名町）の普門寺を間借りして開始したのが始まりである。中村久子は同村小学校教員を退職後、有志の賛同を得て、漁村で放任されている幼児を集めて保育に当たった。当時は時期尚早との反対意見も強かったが、開所してみると70名もの幼児が集まり、保育所の経営費をどのように賄うかが問題になった。そこで、中村久子は教職27年勤務の蓄財を投入し、また、永年にわたる教え子の中から協力者も現れた。こうして、経営も続けることが出来たが、最初、保育料は無料であった¹³⁾。

2) 公立の保育所

大正12年になり、県下ではじめて神戸市に公立の保育所が2ヶ所開設された。1ヶ所は、神戸矯修会の保育事業を受け継ぎ、市立真砂保育所としてスタートし、大正14年に、約400坪の敷地に木造2階建約230坪の建物を新築し市立生田川保育所と改称された。保育室も運動場も広く、特に130坪の運動場には伸縮自在の天幕張りの鉄骨日除装置（日除下72坪）が取り付けられており、巻込自在のため四季を問わず活用された。また、運動場の周辺には、樹木を植え子どもたちが自然に親むような環境が整えられた。もう1ヶ所は、市立兵庫保育所を東出町に開設し、大正14年から事業を開始した。設備については、運動場が生田川保育所に比べると22,5坪しかなく、動植物の自然に親しめる様々な工夫によって運動場の狭さを補う工夫がなされた¹⁴⁾。

全国で最初の公立の託児所は米騒動後の大正8年大阪の鶴町第一託児所で続いて9年に京都で、10年に、東京、横浜で、12年に神戸の順で開設された。名称も大阪が託児所を使用したのに対し、神戸は保育所を使用した。神戸市の保育所公設運営は、画期的なことであったが社会的要請があったとはいえ、民間保育事業の影響が大きかったことも忘れてはならない¹⁵⁾。

3) 企業内保育所

企業内保育所は、鐘紡に続き、日本マッチ、東洋マッチ、中央マッチの各工場に設けられた。企業内保育事業は、女性の労働力確保のためのものであり、企業内保育所以外に多くの保育施設が開設され充実されてくるにつれ、保育内容も改善されてきた¹⁶⁾。

4) 婦人会と保育事業

大正3年石光ミツルは佛教婦人会を組織し、同会の事業として同朋保育園を設立し、

40名を保育したが、婦人会にては維持困難になったため、石光颯太郎と妻ミツルの二人に経営が引き継がれた¹⁷⁾。

尼崎市は工場都市として急速に拡大し、特に工場労働者人口が増え、幼児保育の必要性が高まっていた。しかし、新興都市として発展途上にあつたので、他に急を要する事業が多く、保育にまで手が廻らない実情があつた。

尼崎市婦人会では大正10年、工業都市として尼崎市婦人会の奉仕事業として一般労働者の生産を助長するための幼児を保育することを目的とし、「尼崎託児所」を経営することになった¹⁸⁾。対象は、3歳以上学齢に達する前までとして出発した。保育の目標は、衛生管理を第1とし、夏季には入浴をさせ、衣服の着替えもさせて、また、病児がいるときは、市立尼崎診療所が全面的に責任体制を組み診療にあたつた。保育料は、1日一人5銭とし、内2銭を貯金させ、退所の際に小学校入学の学資にあてさせ、3銭を副食及び間食費とした。保護者に対しては、「母婦会」を開き、講演会などを開催し、保育知識の向上を図り、必要に応じ家庭訪問も実施した¹⁹⁾。

このように、尼崎市婦人会の主な事業は保育であり、さらに、保育料の徴収ができない家庭に対しては減額ないしは無料とするなどきめ細かい配慮がなされていた。

4. まとめ

大正期は明治期に続く日本の興隆期であつたが、また、社会的には種々問題が噴出した時期でもあつた。

第一次世界大戦参戦による軍需景気に酔いしれるや間もなく終戦とともに不況の嵐に見舞われたのである。それは、物価を上昇させ、

中でも米価の高騰は、庶民の怒りを買ひ、米騒動へと発展するのである。そのためわが国の社会事業は、この大正7年の米騒動が契機となり、大正中期から後期にかけて成立したと言われている。それらの社会事業に対する内容は、社会の連帯感、法制の整備、施設等により異なった。

また、保育事業では、大正期の保育所は、地域の実情に合わせて運営されていたことがわかった。県下の保育所の設立過程を視ると、地元婦人会の熱意により設立されたもの、個人の情熱により賛同者を得て設立されたもの、宗教的背景により設立されたもの、特定の篤志家により設立されたものなどがある。また、対象児も乳児から学齢前まで、対象を限定しないところ、その中でも、最初から幼稚園を目指して中産階級を対象に設立されたものと対象を限定しないもの等いろいろである。保育料は無料から比較的高額なものまでであるが、ほとんどの施設で無料、低額、定額の三段階に分けているものが多いことがわかった。保育内容も保育所によって異なるが、公立の保育所では共通して力を入れたものに家庭訪問がある。そこでは、保健衛生の徹底、家庭との連携などがなされていた²⁰⁾。

一方、産業の発展においては、低廉で効率の良い労働力の確保が絶対に必要であった。女工の大半は結婚までの短期間の者が多かった。そのため熟練した者が母親となっても勤続できるように、何らかの手段を講ずる必要があった。この必要性から生まれたのが、工場付設の企業内保育所であった。この保育園の開設により、子どもを出産してからも仕事を続けることができるようになり、企業にとっても、母親にとってもありがたい制度であった。

兵庫県における保育所の歩みのなかで農繁託児所は、大正の末期から昭和初期にかけて、

農村の労働力の確保と児童の福祉の立場から季節託児所の開設が奨励され、農村地域に貢献しただけでなく、この中から常設保育所に移行し、季節を問わず保育がなされるようになったのである。

今回、大正期の民間保育事業の代表的な保育所も取り上げたが、これらは、公立の保育所設立に与えた影響も大きかったと考えられる。

大正期は兵庫県にとっても、近代的社会事業への転換点となったが、保育事業についても、民間の保育事業の先駆者たちを始めとする、多くの人々の情熱があったことを忘れてはならない。

<参考文献>

- 1) 兵庫県社会福祉協議会：福祉の灯，11－13，田中印刷，兵庫，1971
- 2) 阿部真琴：兵庫米騒動記，12－13，新日本出版，東京，1969
- 3) 同上書，54－88
- 4) 兵庫県社会福祉協議会：福祉の灯，11－15，田中印刷，兵庫，1971
- 5) 安達正明：神戸の「米騒動」と社会主義者・そのほか，季刊歴史と神戸，神戸史学会，No 1，2－15，1962
- 6) 新修神戸市史編集委員会：新修神戸市史行政編Ⅱくらしと行政，8－15，田中印刷，兵庫，2002
- 7) 兵庫県保育所連盟：兵庫県保育所の歩み，31，中田印刷，兵庫，1979
- 8) 同上書，33
- 9) 兵庫県社会福祉協議会：福祉の灯，26，田中印刷，兵庫，1971
- 10) 神戸市保育園連盟：神戸の保育園史，42－44，中田印刷出版，兵庫，1977
- 11) 兵庫県保育所連盟：兵庫県保育所の歩み，

- 37-38, 中田印刷, 兵庫, 1979
- 12) 城一男：マザー・オブ・マザーズ, 城泰子, 75-86, 文芸社, 東京, 2003
- 13) 兵庫県保育所連盟：兵庫県保育所の歩み, 36-37, 中田印刷, 兵庫, 1979
- 14) 神戸市役所社会課：神戸市社会事業概況, 135-139, 神戸市役所会計課所属印刷, 兵庫, 1925
- 15) 一番ヶ瀬康子・泉順・小川信子・宍戸健夫：日本の保育, 72, ドメス出版, 東京, 1962
- 16) 兵庫県保育所連盟：兵庫県保育所の歩み, 13-14, 中田印刷, 兵庫, 1979
- 17) 兵庫県社会課：兵庫県社会事業概要, 64-66, 明輝社, 兵庫, 1930
- 18) 同上書 67-69
- 19) 兵庫県保育所連盟：兵庫県保育所の歩み, 34, 中田印刷, 兵庫, 1979
- 20) 神戸市保育園連盟：神戸の保育園史, 94-95, 中田印刷, 兵庫, 1977